

(1)



雲晴

春彼岸号

「雲晴」第四十六号

令和五年三月一日発行

貞林院 瑞正寺
〒125-0041 東京都葛飾区東金町五丁目四六一番五
電話(〇三) 三六二七―三四一五
FAX(〇三) 五六九九―五九一五

釈尊のことば

法句經に学ぶ 13

神田寺住職 友松浩志

すべてのもの
刀^{つるぎ}枝を怖れ
すべてのもの
死をおそる
おのれを
よきためしとなし
ひとを害^{そしな}い はた
そこなわしむるなかれ

法句經 一二九



新しい年になっても、コロナもウクライナの戦争も収まらず、不安な気持ち世の中を覆っています。どちらも人の生命がかかった、死と直結する不安をとまっています。

ウクライナでの戦争は、二十一世紀になって、まさかヨーロッパの国家間で戦争が起こるなど想像もしていなかった人々を驚かせました。第二次世界大戦であれだけの被害を出しながら、その教訓を生かせない人間の愚かさ。それだけでなく、身近な東アジアの国家間でも戦争が起こる可能性があるがあることを知らされました。

誰でも刀剣はおそろしいものです。死にたくはない。それ故に、その不安を減らそうとして、おそろしいはずの武器を準備し、戦う訓練をします。自分が不安なら、相手も不安なわけで、互いに戦いの準備をエスカレートさせていきます。

お釈迦さまは、「おのれを、よきためしとなし」と説かれます。自分が嫌なことは、相手だって嫌なことです。自分が怖いことは相手だって怖い。そう理解し合えれば、戦争は起こらないはずですが、にも関わらず、今でも戦争は起こり、不安が世界を覆っています。私たちが今出来ることは、自分が嫌なことは相手にしない、相手の思いを自分のこととして受けとめる、その程度のことかも知れません。でも、それがまず大切なことではないでしょうか。

唱歌のふるさと 童謡のくに ⑭

著：佐山哲郎

愛のある替え歌

昭和三八年、舟木一夫が歌った『高校三年生』は記録的なヒットとなった。
詰襟の学生服で歌ったのが、ウケたのである。修学旅行のバスの中で最もよく歌われた。

赤い夕陽が校舎そめて



好き嫌いは有るだろうが、この歌い出しがでるとだれもが唱和した。愛唱歌の決定版とも言える青春歌謡でもあった。

ここに一つの替え歌がある。

瘦せたサンマが煙を立てる
なにさ臭いと叱る声
ああー。あああ、結婚三年生
ぼくら狭い団地に飽きようと
暮らす仲間はいつまでも

なにやら佻しいが団地、団地族などという言葉が出来始めた時代でもあった。

替え歌が出来るといことは、その歌がいかにヒットしたかの証明とも言える。

昭和四一年には。バーブ佐竹の『女心の歌』の替え歌

あなただけはと信じつつ
腕に溺れてしまったの
交通法規を忘れずに
つる事故をば防いでね
どうせ車を飛ばすなら
速度守ってを欲しかった

よくできた替え歌である。こういつた替え歌の研究者がいる有馬氏。K T C 中央出版である。

華

花ひらひて
實をむすぶ
好胤

父の師匠は橋本凝胤というお方。今でも師を語る時には「葉師寺の管長さんは怖いお人やった」と言われる人物です。ですが寺で初めて生まれた子だった私は大層可愛がってもらいました。師匠のご機嫌が悪い時には、お弟子さんがそのご機嫌を取り結ぶために「姫を本坊に」と私を呼びに来るのでした。母に管長さんのところについてらっしゃいと言われて曲がりくねった畦道を歩いて

「管長さんこんにちは」とお部屋に伺ったものでした。
冬、その部屋では冬の長火鉢の鉄瓶はしゅんしゅんと湯気を出している、いい香りが漂っていました。今にして思えば、お香好きだった管長さんだから伽羅を焚いておられたのでしょう。お香の稽古をしたときにこれはあの部屋と同じ香だと思った時は伽羅でしたもの。
お部屋の書架にはいかにも難しそ

② 月の兎

高田 都耶子

うな本が並んでいましたが、時に絵本が積まれていることがありました。出版社から届けられたのでしようか、「今日はこんなんやろうな」と渡されたのはジャータカ物語、釈迦仏の前世のお話でした。あの時の絵本ではないけれど、ジャータカ物語を開く度に懐かしい空間と香りが漂ってくるようです。
さて今年の干支は兎。ジャータカ物語の「月の兎の話」はご存知でし

一口法話



「善悪の判断し難き我が身」

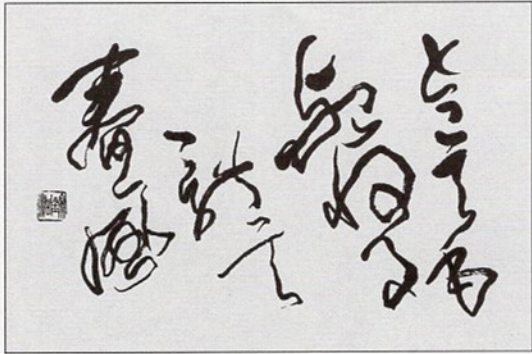
自分自身にとって、物事の善し悪しを判断することはそれ程難しいことには思われません。何故なら自分には良識・常識が備わり、それ程間違った判断をすることは無い、ある程度の判断はできると思っているからです。

ところが、貪りや怒りの心、物事の道理に暗い愚かさの心という煩惱を持つこの我が身でありますから、その煩惱が善悪の正しい判断を知らず知らずの内に狂わせてしまうのです。

後で振り返り、なぜあの時あのような判断をしてしまったのか、そんな自分が信じられない。その時は冷静に判断したつもりでも、後々後悔する時があるものです。誰しも大なり小なり経験があることかと思えます。

私たちの判断基準は、好き嫌いの感情が働きた自分の都合の善い方に自然と肩入れしてしまうこ

誘いの書



ようか。確かこんなお話でした。お釈迦様が兎として生れて森に暮らしていました。猿とカワウソとヤマイヌは仲良しの友達でした。ある日森に来たバラモン僧にそれぞれがマンガー、川魚、肉と牛乳などの布施をしたのですが、何も布施するものがないウサギは、バラモン僧に小枝を



集めて火を起こしてくださいと頼みました。焚き火が立ち上ってきた時、ウサギは「わたしは何も差し上げることができませんから、どうか私を食べてください」というや炎に飛び込んだというお話です。実はその年、老いた旅人は帝釈天だったのです。人の為に自分を捨てたウサギの行いに感服され、焚き火の灰で月にウサギの姿を描いた……。そんなお話でした。娑婆往来八千遍つまり何度



も何度も生まれ変わって修行されたお釈迦様がウサギであった時の「捨身」の行を語った物語です。少し長じてから、理屈言いの私は父に「月の兎の話」は納得できない、猿やカワウソやヤマイヌの立場はどうなるの。仲良しのウサギが居なくなつたし、自分達を責めたのではないかと言つては父を困らせておりました。父はそんな理屈よりなあ、大事なことはそれやないんやでと言いたげでした。やとわたたくもその気持ちかわかる様になつてきました。お月様を見上げる時にそんなことを思い出し、あの時の父の顔が懐かしく過ります。大好きだった橋本凝胤師、大好きなジャータ力物語の大好きなお話です。

とがあり、正しく判断したつもりでも、気づかぬうちに煩惱の仕業が働いて、正しい判断を狂わせてしまうのです。法然上人が「この私たちの心の動きは酒に酔っているようであつたり、また一瞬のうちに百通りものことが一気に浮かんで来てしまふ、善悪の判断が狂ってしまうのですよ」とお示しの通りの、私たちなのであります。このように自身の判断もままならず、自分の力で仏道修行を成し遂げることの出来ない煩惱だらけの私たちだからこそ、阿弥陀様の必ずお救い下さるというお誓いを信じて、お念仏のお称えを続けていくことが大切なのです。合掌

「どこでも死ねる體で春風」

故林 錦洞書

貞林院瑞正寺 住職 林 清方

この作品は平成十八年に「墨」という書道雑誌に「山頭火特集」で掲載されたものです。

種田山頭火は大正から昭和の初めに活躍し、これまでの五・七・五の約束事を無視し、自分のリズム感を重んじて詠んだ自由律俳句の俳人です。口語のような句はどれも分かりやすく心にすっと入ってくるようなもの

ばかりです。在家出身でありながら曹洞宗の寺で出家得度をしており、行僧の姿で全国各地を放浪しながら句を詠んでいたことから昭和の芭蕉とも呼ばれています。

作品は句集「草木塔」の中の一句「どこでも死ねるからだで春風」が題材とされています。先代の作品には俳句を題材としたものも多くありますが、特に山頭火の句に惹かれるものがあつたのでしよう。彼の生き方

や自然に対する思いや感じ方に共感するものが多かったものと思われまふ。

平成十八年と言えば先代は既に八十四歳を迎えており、亡くなる三年前でもあります。この頃の口癖は「自分の寿命はすべて阿弥陀さまのおはからい、いっつお迎えが来ても悔いがない」と言うものでした。この句にある春風と阿弥陀さまを重ね合わせ、自分の身はお任せしてしまふと言う思いが感じられます。

春の彼岸法要ご案内

本年の春の彼岸法要につきましては左記のとおり行います。

ここ数年新型コロナウイルス感染予防のため檀信徒の皆様には本堂内へのご参列をご遠慮いただいておりますが、本年より通常の形で法要を実施いたしますのでどうぞ可能な方はご参列ください。

塔婆をご希望の方は、お早めに電話・ファックス・メール等にて寺までお申し込みください。

三月二十一日(火) 正午

塔婆料 三千元

回向料(お布施) 志納

*なお本堂内へのお参りまたはトイレなどで室内にお入りになる際は、必ずマスクの着用と本堂入口での手指消毒を引き続きご協力ください。

当山第二十四世祖洞上人内室
林ひでの五十回忌法要を厳修

住職の祖母にあたります林ひでの五十回忌法要を命日の二月一日に寺族のみで厳修いたしました。

祖母は当山が合併前の旧瑞正寺の一人娘として生まれました。先代林錦洞の書道の師林祖洞と結婚しましたが、祖洞が五十一歳と早くに亡くなり、先代は書道の稽古場として三田の旧貞林寺に居ることが多かったため、瑞正寺の留守番として長く寺を護ってきました。「おヒデさん」の愛称で地元のお檀家さんからも親しまれ、小柄でありながら威勢のいい元氣なお婆ちゃんでした。孫たちにも優しく、特に兄の英道には顔と性格が祖洞に似ていたせいか特に可愛がっておりました。



「瑞光院心譽澄室秀温大姉享年八十二歳」

五十回忌の法事は「弔い上げ」とも言われ一般的には最後の年回法要とされており、その後の年回は百回忌となります。つまり最後の追善供養となります。約半世紀という長い年月が経っているにもかかわらず家が絶えることなく、こうして自分が元氣でいられ先祖さまの法事ができること。これは大変に有り難い縁であり、それらのことに対して感謝の気持ちも含め供養する心が大切だと思います。

檀信徒の皆様も「四十九年も経っているからもういいでしょう」ではなく最後の大きな区切りとして是非ご供養してください。

施餓鬼法要のご案内

本年の施餓鬼法要は五月十四日(日)に厳修いたしますのでご予約下さい。本年より春彼岸法要と同様に通常の形で法話と法要を行いますのでどうぞご参列ください。ご案内につきましては、あらためて四月に発送いたしますのでご覧ください。

なお当日は施餓鬼料の受付のみで、護持会費の受付はありませんのでご注意ください。

(貞林院瑞正寺)